

---

# 最弱の飼い主と世界最強の転生猫

シャルル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱の飼い主と世界最強の転生猫

### 【Nコード】

N4784Z

### 【作者名】

シャルル

### 【あらすじ】

転生を何度も繰り返した男、平成生まれの少年、そんな彼は一度目の転生で魔王になり最強の魔力を得た。次に二度目の転生で人のいない世界、魔物だけの住む世界へ転生しそこで最強の剣術をマスターその後、三度目の転生で彼は四足歩行の普通の猫へと変わった。しかし、剣を口に加えるとあらゆる剣士を負かし、一度魔法を発動させると、敵をことごとく粉碎していく。

そんな主人公の異世界ファンタジー

### 三度目の転生は人外の者

幾千の世界、幾千の星が、この広い夜空の彼方にはある。

人は誰でも異世界へ憧れ、夢を、理想を、様々な事を願って日々の日常を過ごしている。

他者からのストレスや、社会的拘束からの開放を求めて、人は違う世界へ行ってみたいと思うのだらう。しかし、これだけは言わせて欲しい。全世界の異

世界に憧れる人間たちよ

異世界なんてそんなにいいもんじゃないぞ？ 怖い魔物出るし、自動販売機も無ければ

絶対に安全といえる国もない。そこらじゅうに日本では銃刀法違反扱いになる

刃物を手にした連中もいるし、殺傷能力のある魔法だってある。なにより転生先が平和な異世界とは限らない。

俺、竜崎・隼人様が経験した異世界の事をこれから話そう。

まずはじめに言っておく、俺は平成生まれの日本人だ。だがそれももう100年近く前の話になる。日本という世界があるその世界で生きていた俺は、高校最後の夏、小さな子供をかばって車にひかれて死んだ。

即死だったらしい。その後すぐに俺は暗闇に飲み込まれた。

人は死ぬとある一定の者が目の前に現れると思っ込んでいます。

有名なのが神様やら、死神だ、それを俺は一般人らしく現れるのではないのか？ とその時は思ったが

その思考もしばらくして暗闇に飲み込まれ、完全なる闇へと俺は落ちてしまった。

飲み込まれてすぐに、俺の意識は暗闇から突然浮上した。

それはなんの前触れもなく、本当に突然だった。

暖かな感触が頬を舐める。

それに思わず閉じていた目を、あるはずのない目を開き視界はうつすらと照らされた小さな部屋を映しだした。

そこには、白色のベットとオレンジ色の光を放つ蝋燭のような物が部屋のあちこちに

置かれ、すぐとなりにはテラスへと続く窓のようなモノが月明かりを僅かに漏らして開いていた。

再びあの生温かい熱が頬に走る。

思わずその方向によくわからないまま目を動かす。するとそこには黒髪をした

美しい瞳をするティアラを頭にかけて若い女が、上着だけを着た状態で

寝転んでいた。どうやら俺自身も寝転んでいるのか彼女と同じ高さで目が合わさった。

それと同じくして、ぼやけていた意識が更にすっきりと晴れていく、同時にペロリと舌で唇を舐める

女が、俺に対してやわらかな甘えるような声で言葉を漏らした。

「ねえー魔王様……どうしたの？ 突然ポーとしちゃって

早く続きしましょうよ……ねえー早く」

彼女の片手が俺の首元に触れると、甘い匂いと大きな胸の柔らかな感触が

俺という男の体を反応させた。

俺は慌ててもがくようして一歩後へ下がるが、彼女は微笑し迫ってくる。

「ちょ、ちょっとタンマ、えーと……今の状態は一体どういう状態なんでしょつかね？」

その日、俺は一度目の転生をした。

転生というよりも一度目は存在している存在の魂を侵食し、己のものにした

という方が正しいだろう。

なにがどうあれ、一度目の転生は魔王軍の最強将軍、魔軍の王、魔王だった。

その時、その世界の魔法はすべて習得し、絶大な魔力を手に入れた。

あの頃の俺は眩しかった。異世界とはなんて最高な場所なのだろうと

思った。多くの女を抱き、子供にも恵まれた。人々とも停戦協定を結び、世界は平和になった。なのにあの勇者の野郎―は俺を

世界に不必要なものだといい、俺の人生の幕を伝説の剣エクスカリバーで

終わらせやがった。あの時の屈辱と痛み、今でもこの身に記憶として残っている。

で、俺は再び魂を暗闇に飲み込まれ、次に目覚めた時は大樹とみどりのあふれる

恵みの大地だった。だがそこには何一ついない。言葉の通じるものはおろか

人という人種すらいない。その世界は魔物だけが住まう地獄のような土地だった。

俺の姿は白銀の髪をした以前の魔王の姿だった。肉体は前の世界に置き去りにしてきたはず

なのに、なぜ、と思ったが、60年もの年月はそんな俺の考えをどうでもいいものに変えてしまった。

俺はなぜか右手に握られた数本の刀を手に暇を持て余すかのようにして60年間も

魔物と狂ったように戦ったのだ。そして俺はその命を大地の魔物、エスカーダに飲み込まれ

一生を終えた。それが数分前の話、そしていま、俺は自らの姿を

悟り

絶望に全身が震えていた。

同時に頭上から声上がる。俺の体は声の主に抱きかかえられ両足を無防備に空にぶらつかせると、それに抗うことも出来ず俺はただ

目の前に広がる軍服を着た16〜17の女を見据えて微笑を浮かべた。

「ミーちゃん！ 私やるわ！ 戦場で私の事を認めさせて見せる」

そう言つとオンナはやわらかな表情で俺の頭を撫でながら、俺を綿のようにふんわりとした質のいい地面に下ろすと、そそくさと部屋を出ていった。

「俺は二度も転生を繰り返した言わば異世界にかんしちゃー他者をも上回る

適応力がある。だが……これは無理、絶対無理。てか、これて魔王の時と同じく他者の体を侵食し奪つたてことか？

だから今の俺の体はこんな……白くて、柔らかな肉球があつて、長い尻尾を持っているのか……

体中に白と黒の毛が生えてて、てかこれ猫じゃん！ どう見ても猫じゃん！ 魔王だった俺が

最強の俺が、ただの猫になつちまつたあ！！！！」

その日、猫の声が少女の個室から大きく漏れたことは言うまでもない。

使い魔のランクはSSS？

煙幕の上がる荒地を蟻の行列のように進む人の群れ。

数日前に激しい戦闘があったらしい。

俺は今そんな死臭と何かが漕げるような匂いの中

少女、ルナリア・ロア・アナスタシアの足元を歩いている。

当初の計画では、すぐにこの女から離れて自由気ままに生きる予定だった。

猫になってしまったことは誤算だったが、とにかく自由に生きていけると思っていた

まあー猫の人生なんて女もいねえー食い物もろくにねえーなりに出せなんてモノとは

縁遠いものだろうが、自由は皆平等だからな。

しかし、その俺の計画は簡単に、本当に簡単に粉碎された。

どうやら、この体はただの猫の体ではないらしい。

この世界には使い魔っていう魔法で魔を帯びた魔物呼び出す魔法があつて

例えるなら、俺が魔王時代に作り出していた魔王兵のような物だ。その魔王兵、つまり使い魔がこの猫の体だったってことだな。

そして主人は俺の右を歩いているこの黒髪の女。瞳は薄い灰色の女小隊長だ。階級は曹長、部隊の総人数は20人程度。

それでもこの若さで隊を任されるといふ事は少なからず実力はあるといふこと。

なくては俺が困る。

なぜなら、使い魔という存在は主が命を落とせば同時に使い魔の命も消えるのだ。

それはつまりこの女が死ねば、俺は共倒れって事だ。

だからこそ、俺はこの女をめんどくさいけど守ってやらないとならない。

幸いにもこの世界では魔術師が使い魔と契約した場合、召喚された使い魔は

人の言葉をしゃべることができるようになってる。

どういう理由かはわからないが、使い魔を呼び出すとき契約として主の血液をわずかに使い魔の体に注ぎこみ契約の烙印をその体に記す。

それがわかばかりか話せることに関係しているのかもしれない。そんなことをルナは言っていた。

まあーそんなわけで今の俺は人の言葉を喋れるのだ。

「臭うぞ？　かなり臭うぞ……」

俺は彼女の足元でそういった。

理由は簡単、獣の嗅覚つてのは人の何倍もよく効くわけだ。

それはつまり、今の俺がいる場所は動物にとって地獄のような場所、死臭と焦げた匂い、本当に辛い。辛すぎる。

だからこそのつばやき。

それにルナは前を向いたまま茶色の軍服をシャキシャキと動かして前へと進みながら真剣な声で言ってくる。

「ミーちゃん、ファイト！　私も匂いに負けず。敵兵に負けず頑張るから」

「軽！　俺にとってどれほどのこの状況が地獄かわかってのかわか？」

「地獄？　そうね。この先の第三ブロックから地獄になるわ！　気を引き締めて

頑張らしましょうー！」

「……」

言葉と言葉のキャッチボール、そんなことを学生時代に先生が言っていたが

この女のそれはあまりにも欠如している。

人は状況に応じて言葉を交わせるコミュニケーション能力を必要とする。だが、この女はそんな人のまあ、猫だけど、猫の話をちゃんと

理解して会話をしていない。目先のことにばかり気を取られて俺の話なんて

1割ぐらいしか耳にしていないんだ。そんな奴がなぜ小隊長なのか

なれたのか理解に苦しむところだが、とりあえず今は俺の周りを結界で

コーティングするか。もう我慢の限界だ。

「時の螺旋に生まれし狭間の層よ、我の名のもとにその姿を示し我を加護せよ。【結界陣<sup>ディールバック</sup>】」

口にした瞬間、小さな体を黒色のオーラが包み

風を巻き起こしながら現れ、外気の匂いも熱もすべてを遮断し、小さな無の空間を体の周りに展開させた。

「ふう……これでなんとかしのげるな」

そういった瞬間、周囲の人間からなにか視線のような物を感じて俺は

思わず振り返った。

すると目を瞬かせて驚く部隊の兵士たち。

その中でも最も年配と思える40代半ばの錆びた鎧を着た男が俺を見ながらルナに向けて声を上げてくる。

「隊長、質問があるんですがいいですかねえ？」

それにルナは振り返り頷きながら笑顔でこう答えた。

「いいわよ？ なんでも言って」

「んじゃー早速」

「うん」

「その隊長が連れてる猫、いや使い魔か、その使い魔ランクはいくつなんでしょう？」

見る限り、Fクラスの使い魔に見えるのですが」

それにルナは一瞬チラリと俺の方を見てからすぐに答えた。

「レグルス・ローラー伍長の言うとおり、この子はランクFの下級使い魔よ？ それがどうしたの？」

「なら、おかしいだろう？ 下級使い魔とさえも」

ほんの僅かしか魔力を待たない言わば雑魚の

使い魔、今みたいに全身から魔力をもれ出すほどの力を持っているわけがない。一体なんなんですか？

その猫は……」

それに俺は振り返り、尻尾を振りながら男に言ってみせる。

「ああーそうなの？ 使い魔にはそんなランク付けがあるんだ知らなかった。でもまあーランクで言うなら、俺はSSSくらいにはなるだろうね。もしかしたらそれ以上かも。まあーとにかくこれからよろしく」

「SSS……なんて自信家な使い魔なんだ……飛龍に匹敵するぞ？ それを知っていて言ってるのか？」

それにふてぶてしい態度で、俺は言った。

「飛龍？ 何度か倒したことがあるけど、あんなのがSSSなら俺はもっと上だな。うん、自信持って言える」

それに男が呆れるような目を俺に向けてくる。

しかし、事実は事実だ、昔俺は飛龍を何頭も配下に持っていた。なによりそれらすべて俺自身の力でねじ伏せ従わせてきた。

飛龍など恐るに足りない。

そんな風に内心思いつつそんなことを言った。  
いずれ、俺の力ははつきりとする。それまで周りの連中が  
信じなくてもそんなことどうでもいいこと。  
俺は彼女を守って力を示せばいい。

使い魔のランクはSSS? (後書き)

何度も内容変更申し訳ない。しかしこれで安定しました  
これから戦争に向けて猫がハイテンションで戦場を  
駆け抜けていきます！

## 赤き騎士

「諸君！ ようやく我々は第三ブロック、永久の都アルバストに到着した。前線部隊の報告によると、敵勢力は中央を突破後今もこちらに向かってきている。したがって我々第13中隊は先行する敵兵の撃破、並びに巻き返しにかかる！ 諸君の武功に期待する！」

200から300人ほどの軍人が噴水の吹き上がる大広間で整列し、兵士の前に立つ将校の言葉を聞いて一斉に胸に手を当て活気に溢れる声を漏らし、鎧やローブを纏った人間たちが一斉にその足を進め始めた。

そんな連中の中に俺は踏まれないようにルナに抱きかかえられ中央の軍列に並んでいた。左右は長距離魔法によって破壊された半崩壊の建物が並び、あちらこちらに爆炎が上がっているのが見える。

ここまで来ると戦争に出向いたって感じが伝わってくる。

戦いなれしているから別に怖いとは思わないが

緊張の糸は決して解くことはなかった。

理由は単純明快、油断するものは、戦場では長生きできない。

それは俺の教訓だったりする。

なにせ油断したからあのバカ勇者に殺されるハメになったわけだからな。

しかも今回は俺を抱くルナのやつも守ってやらないとならない。見るからに魔力は低いし、身体能力もさして高いとは思えない。心配だ……。

俺はそう思いつつも、前に続く兵士たちの列を見渡した。

最前線、地平の果てにそれは映り込む。

赤き鎧を纏いし、数騎の馬に跨る騎兵。

それはまっすぐこちらに向かつてきていた。

おそらく距離にして2キロ弱、片手に大槍を持ち

先頭を走ってくる男が次々と前線の兵をなぎ倒していく

その後方にいる二人も同じく大勢の兵士を長剣で

切り裂き首を飛ばし腕をもぎ取って続いている。

その後方には二人の赤色のローブを着た者が

空中に魔の槍を放ち地面に生き延びた兵士を容赦無く焼き尽くす。

その光景はまさに逃げ場のない地獄。

遅れて、中央から悲鳴の聲が上がるのが聞こえ

ルナや背後にいる兵士たちが困惑の声を漏らした。

「敵襲？」

「な、何だ？」

年配の男レグルスとルナが同時にそう言うと、すぐ背後にいた

薄い水色の髪をした灰色の魔道具をみにつけた女が二人を見なが

ら漏らす。

「数は……6、いや5人かな？　大きな魔力を秘めた者。

絶対に戦ってはならない相手。私は……そんな風に思う」

それにルナが俺を思いつきり抱きしめて振り返り

水色の髪の女に緊張で張り詰めた表情で漏らす。

「5人……たった5人で中央軍に特攻をかけてきたってどういうの？

それにイルナ、最後に絶対に戦ってはならないって言ってたけど

それは直感？」

「うん……なんか、嫌な感じがする、そんな風に私は思う」

青い瞳を見据えてルナは彼女が頷きながらそう告げるのを聞くと顔を曇らせ、腰に背負う剣に手をかけた。

同時に俺は彼女の手から抜け出し、彼女の肩に飛び乗る。

「やる気かよ？ 俺が見る限り、かなり腕のたつ連中だぞ？」

一目見た瞬間、あの五人が只者ではない事は理解できた。

洗礼された武器の扱いや、魔法構築の速さ。

かなりの戦闘訓練と死線をくぐり抜けてこないと

ああにはならないだろう。ここにいる連中では少し荷が重すぎる。

「そんなこと、たった五人で前線部隊を粉碎している様を見れば誰だって

わかる。でも我々は軍人なのよ！ 逃げるなんて選択権私たち

歩兵にはないわ！」

どうやら、やる気らしい。

万が一あの五人に挑めばこの部隊はあっさり粉碎されるだろう。

それは俺が困る。

ならば、やることは決まっている。

「物好きな女もいたもんだ、自ら戦争に出向き、勝ち目のない

戦いだとわかっていてそれでも戦場を駆けるか」

レグルスが鎧兜をかぶりながらそう言うと、紡ぐように続けた。

「だが、悪くない。俺は隊長に付いて行くぜ！ みんなもそうだと

！？」

同時に背後に佇む数人の兵士が片手を上げ歓声を上げる。

「俺達軍人！ 死ぬも戦場、笑うも戦場ってな！」

「いみわかんねえーけど俺も隊長に続くぜ！」

「……体は逃げなくちゃって、言ってるけど……私は逃げるのが嫌い

そんな風に思う」

大勢の兵士たちの声が漏れ、それは一斉に周囲の部隊にも感染し

ていき

いつのまにやら熱気を放ちながら中央から向かってくる5人の兵

士に

突進をかけた。

俺はそんな熱気の溢れる中、一人ルナの元を離れて屋根づたいに

登る。

同時に、魔力開放を始めた。

足元が黒色に輝き、魔力が全身から溢れ出る。

更に言葉を口にする。

「我、古の魔獣を呼び起こす闇の王なり

我の言葉に従い、地獄の門番よ、その姿を我の前に示せ  
ケルベロス  
地獄獣」

それは大きな3つの首を持つメタルな装備をした

地獄の番人、かつて門より生まれしその魔獣は

その息はあらゆるものを火炎に飲み込み、黒炭へと返す。

今では俺の忠実なる下僕、飼いならさえば可愛くも思える。

俺はそんな化け物を屋根づたいに召喚した。

白色の毛皮を持った犬のような姿のそれを見据えて俺は言う。

「ケル、今日の餌はアイツらだ、他のやつは食べるなよ？」

「アウ？ ヒト、食ッテ、イイノカ？」

巨大な四本の足、一本の長い尻尾、灰色の息を吐く巨大な怪物。

それを前にして俺はそいつの頭を撫でながら言ってる。

「ああ、アイツら5人だけなら食べてもいい。でもかなり手強いと  
思っから

本気でヤレよ？」

そう言うと、魔獣は風の如く素早い足取りで其場から消えた。

## 紅蓮の狼

四人の部下を背にして男は思った。

恵まれている、と。

振りかざす槍を敵兵に浴びせ、命を奪うそのさなか、私はそう思った。

単騎での特攻、普通なら愚かな行為になるその行動は

四人の部下によって最も安全で、最も兵士の浪費を少なくする結果に

繋がっている。ここに集うは5000騎兵に負けず劣らずの私よりも直ぐって集めた剣術士や魔導師、その力はあらゆる兵を粉碎し、ことごとく破壊する。戦場ではこう呼ばれている。

紅き紅蓮の狼、と、それは戦場を駆ける赤い色の鎧と

降り注ぐ血の雨を見た兵士たちが名付けた名前。

だが、私はその呼び名を気にかけている。

赤は強さの象徴だ、己の強さだけが我が帝国の

武器、強ければ出世し、弱ければ死ぬ。それが我が国家の

生き方、だからこそ負けない。

だからこそ、平和を歌うあのような弱き人の子の

集まる国などに負けるわけがない。

それはこの戦争に参加する我等帝国の兵士ならば誰もが思うことなのになぜ……私は地面に血反吐を吐いている。

「ぶはあ……」

それは刹那のように瞬く間に起こった。

黒き影が一瞬視界に映りこみ、そして見えぬ何か

私の体を蹴りとばした。

それは信じられないほど強い力。

纏う鎧が亀裂を生み、破壊される程の圧倒的な力。

「隊長！ 大丈夫ですか！？」

胸に手を当て、握りしめていた大きな槍を杖のようにして地面につきたて、体を地面から起こすと、周囲に目を写した。

血色に染まる石畳の通路、馬から降りて、周囲を警戒する

二人の騎兵、魔法結界を展開する魔導師。

そして、最後に写りこんだのは20メートルほど前に佇む

巨大な化け物。

「……アイツは何だ？ どこから現れた!？」

グルルと喉を鳴らし、灰色の息を吐く三頭の頭をした巨大な怪物。それが今、どこからともなく現れて、我々の前に佇んでいる。

その背後には動揺する敵兵の姿。

つまり、アレは敵の差し向けたものではない。

そもそも、こんな怪物を差し向けるはずがない。

もしも、こいつが使い魔だとしたら、それを召喚した

人間はバケモノだ。とにかく今は、体制を立て直し、

この化物を排除することが先決だ。

「リーシャ、グロール、火炎と雷撃で援護。私とラル、ジীগスはヤツの足を潰す。雑兵は捨ておけ、行くぞ!」

「サー!」

同時に魔導師は背後へ、私と二人の剣士は魔物に向かって突進をしかけた。

「前足は私が殺る、お前たちは背後の両足を潰せ」

大きく槍をしながら、前足に向かって放つ。

同時にラルとジীগスが背後につき長剣を魔物に向けて斬撃を浴びせる。

背後からは魔導師たちが魔方陣と共に発動した火炎と雷撃を帯びた槍が放たれ

休息加速し魔物の全身に突き刺さる。

通常の魔物ならば、それで勝敗は決しているはず。

連携も攻撃も、全てが完璧だった。

手応えもある。

「……クソ！」

それは、天がよこした動く災害、人が触れてはならなかった存在。絶望とはこういう事を言うのか、胸を焼かれ、片腕を食いちぎられた。

私と共に生きてきた私の片割れは平然と立ちつくす化物に持つていかれた。

不意にラルやジীগスに目を向ける。そこにはまだ健在の二人の姿がある。

私は決めねばならなかった。

不敗神話の終わりを告げねばならなかった。

「撤退だ！ ツ、この化物には准将クラスもしくは上級魔導師の力を持つてせねば勝ち目はない。我ら独立騎兵隊レッドウルフズはこれより、全身全霊で撤退を開始する！」

片腕から漏れ出る大量の血液、それを無視して私はそう言った。

まだ、ここで散るべきではない命を救うのが隊長である

私の役目だからだ、逃れられるか、それはわからない。

だが、全身全霊で引けばあるいは。

その瞬間、背後で魔法を放つ魔導師から

閃光が上がり、空間は白き光に包まれた。

同時に意識の薄れ行く中私は加速した。

友軍の待機する街の中央へ向かって。

しばらく走ると、私は魔導師たちの乗っていた

馬に担がれるような形で乗り重なり、後退した。

しかし、あの魔物は追っては来なかった。

「何故だ……」

それが私、グレイブ・レイスの、その日、最後の言葉となる。

## 撤退

飛び交う火炎、入り乱れる兵士たち。戦場はケルベロスの出現により

かき回され、一時は勝利の兆しを見せていた。しかし、敵軍の切り返しの速さと

大軍勢の前ではケルベロスはなすすべがなく、元の世界へと戻す羽目になった。

今現在俺は、第十三中隊隊長、アルーガ・ベルゼルス中尉の消耗し減少した

50人から780人の分隊の人々と共に撤退を余儀なくされている。

幸いなことにうちの隊長、俺の主人は無傷、さらに言えば

ケルベロス消失の後、戦闘を繰り広げた後だと言うのに、うちの連中は

誰一人死んではいない。飛び交う魔法を粉碎し、向かってくる剣士を

なぎ倒す、それがこの部隊にはできる。魔法は底が見えない女魔

術師

によって粉碎、および発動し反撃。近接戦闘はレグルスと他数名の兵士によって強固な守りと攻撃で跳ね除ける。

攻撃力も守備力も精鋭予備軍のようなメンバー。

単純な話、この部隊は強いのだ。

もちろん、先ほど単騎で突撃をかけてきた連中よりは弱い。

小隊にしては強いほうだと言う事だ。

俺はそう内心想いつつ森の中を進んでいた。

周囲には疲弊した兵士が歩き、すぐ前には黒髪の少女が歩いてい

る。俺はその少女に問いかけた。

「ルナ、俺たちはどこに向かっているんだよ？ 隊長さんの声を聞きそびれちゃってさ」

それに振り替えり、上から眺めるようにしてルナは俺を見据えた。その時彼女の瞳が太陽の光を反射して、白銀に輝いているのが見えた。

「私たちはこれから、この森を抜けて、ランゲストの町で第18中隊ならびに第11中隊と合流、さらに北上して

第21大隊と合流後、ヘルベル砂漠の黒き壁の砦に向かうみたい」  
「アルバストの後は砂漠の砦か……負けるのは俺の性分じゃないぜ？」

今度は勝てる戦いなのかねえー」

髭面で錆びた鎧を纏うレグロスが俺の背後からそう言う。

「砂漠かあ……暑いのかな？ まあーそんなことはどうでもいいかそれより肝心なのは休憩はいつあるのかって事だな、うん」

別に疲れていたわけじゃなかった。正直アルバストの町で俺がやった事といえば、確実に防げないであろう大型魔法の駆除とかケルベロスの召還くらいだった。

「休み……」

しばらく空を夢見る瞳で見据え、彼女はすぐに頭をブンブンと左右に振って

否定するかのように、自分の欲を打ち消すように切り出した。

「何を考えているの！ 私は……こんなときにアレのことなんて……今は戦争中で、しかも、初陣に失敗したためだめな状況なのよ？なのに私という女は……」

俺はおどおどする彼女を横目に圧迫される自分の胸元に鋭い一撃を放った。

プニユ

同時にもつちりとした感触と生暖かい人肌の熱を右手に感じ頭上を見上げた。

上には水色の髪をした眠そつな表情の少女が俺のことを眺めている。

彼女の手は俺をばつちり捕らえ、俺は豊満な胸と柔らかな感触を感じつつ呼吸困難に追い込まれていた。

「むう、シ、死んでしまう……違う意味でも死ぬ……いや極楽へ……」

俺は男だ、魔王時代には子供だってできた。

だが、男という生き物は女に過剰に反応する。

甘い匂いや男には無い胸に魅入られる。

紳士としてこのようなハレンチなこと許されるはずが無い。

見る限り、この女は男を知らないように思える。

だからなおさら、俺は抗わなくてはならない。

しかし彼女の手は無常にもさらに強く俺を抱いた。

続くようにして俺の息も圧迫が増すに連れて細くなっていく。

「隊長の考えてることわかる。私、女だから……」

ポカポカ……洗う。好き、そんな風に私は思う」

俺の意識が朦朧としていく中、彼女の小さな言葉に反応するよう  
にして

ルナが歩み寄ってきて、彼女の耳元でつぶやいた。

「わ、私はけっ決して……お風呂なんかに入りたいなあーなんて  
思っていませんからね？」

「女、同士、隠し事無駄、女見抜く目すごい。

私もお風呂……入りたい……」

「……むう……」

ルナが黙り込んだその直後、俺の意識は彼女の豊満な胸に包まれ、  
意識を闇へと落とした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4784z/>

---

最弱の飼い主と世界最強の転生猫

2012年1月6日10時53分発行